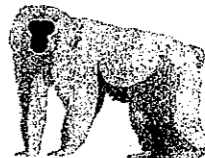


# 特集ワイド

2016年の干支は1956年に次ぐ戦後2度目の丙申で、申年は戦後6回目となる。専門家によると、丙申は「革命」の年。さまざまな場面で時代がうねり、争いごともあるそうだ。56、68、80年……申年の来し方を振り返ると「なんとなく」そんな気がしてくるから不思議だ。  
【藤原章生】



## 2016年の干支 戦後2回目

# 丙申は大変革の年?

申年。まずは人を見てみよう。男優は竹脇無我さんに渡瀬恒彦さん、役所広司さん、やま重厚なから、お茶の間をにぎわす俳優が並ぶ。若手では大沢たかおさん、岡田准一さんとスター性が強い。女優はやや小粒な感があるが、男たちを騒がせた東てる美さんや壇蜜さんが浮かぶ。

干支の起源は紀元前の中国の暦で、占いの易の基本となっている。大阪府易道事業協同組合理事長の梅川泰輝さん(51)の見立てはこうだ。「申年生まれは義に厚い半面、変革を望む人が多い。中でも56年生まれの丙申は、桑田佳祐さんや長瀬剛さん、竹中直人さんらエネルギッシュな人が少なくなく、音楽など業界の形を変える人といっても過言ではありません」

干支という十二支にあてはめた動物が流布しているが、大事なのは甲乙丙で始まる10種の「十」の方向性。「丙」は気性の激しい女性が生まれるという迷信がはびこる丙午で知られる。中国哲学者、竹内照夫氏の「干支物語」によれば、丙の古来の意は「かまどの火のもえるさま」。なんだか物騒な感じだ。

「来年は丙の火が申に乗ってきますので、(中国古

代)の自然解釈(陰陽五行)では、激しい太陽の熱さと共に、地上全体の火山活動が活発になる可能性が高い」

一方、十二支の「申」は同音によれば「伸びる」が語源。「屈伸する体」つまり「その身が軽快に動き、いかにも伸び伸びとした感じ」から「猿」を重ねたという。「万物が五つの物質からできているとする五行説では、申は土中の金属である金に当たり、燃え盛る炎の温度を下げる作用がある。ですから噴火といっても大噴火ではなく、中小規模が度々起こる程度だと思えます」と梅川さん。

少し、安心した。

では、過去の申年には何が起きたのか。

作家の田中康夫さん(59)に年表を見てもらった。田中さんは丙申の56年生まれで、「物が改まる」という意の庚申、庚申の80年に初の小説「なんとなく」、クリスタルでデビュー。申年とは縁の深い人だ。「56年に話題となったもはや『戦後』ではない」は、誤読され続けてきました。量の拡大から質の充実へと、発想の転換こそ日本には必要だと指摘したのですが、逆の意味だと思われています」

56年の「経済白書」にこうある。「いまや経済の回復による浮揚力はほぼ使い尽された(略)戦後の一時期にくらべれば、その欲望の熾烈さは明かに減少した。もはや『戦後』ではない。(略)回復を通じての成長は終わった。今後の成長は近代化によって支えられる。ここで言う近代化とは『自国を改造する過程』。その苦痛を避け、自国の条件に合わせて外界を改造しようという試みは、結局軍事的膨張につながった。数量景気の成果に酔うことなく(略)新しい国造りに出発することが当面喫緊の必要事」と説いている。

評論家、中野好夫氏は56年2月号の「文芸春秋」で「もはや……」という同じ題の論を発表し「軍事力に頼らない、質の高い小国を目指せ」と唱えた。「北歐三国が軍事的にいえは決して一等国、大国とはいえない(略)が、その中で私たち

日本人など考えも及ばぬ平和で高い生活が築き上げられている。小国の新しい意味を認め、それを人間の幸福の方向に向って生かす新しい理想をつかむべきである。古い夢(の)をさげ、他は56年で目を引くのは『日曜劇場』だと田中さんは言う。「一家全員がお茶の間でテレビという習慣が始まり、一方で高齢者問題を扱った『橋山節考』を深沢七郎が発表した。56年は『高齢化率』の定義が国連で決まった年。偶然とは思えません」

次の申年、68年は繁茂を表す戊をかぶせた戊申で、作家、邦光史郎氏の「二十支から見た日本史」によると「紛争多発の年」だ。

「動乱の年ですね。三里塚大学闘争に、億田事件。機動隊の『無駄な抵抗はやめろ』と言っセリフが、そしてCMの歌『大きいことはいくらでも』もはやりました。田中さん。すでに『小国を目指せ』論など、どこ吹く風というところか。孝行息子(の)代表のようなマラソン選手、田谷幸吉氏の死も『時代が変わるといいう意味では象徴的です』。ボンカレーや吉野家などファミストフード元年でもあり、多方面で時代が動いている。

続く80年はどうか。「YMOが人気を集め、高度消費社会の幕開けです。ルービックキューブは籠もり系ゲームの始まり。(浪人生が両親を殺す)金属バット事件は郊外型家庭内事件の先駆け。みんなで渡ればこわくない、なんとなくの空気で、首をすくめていく時代という気がします」

ここで田中さんは56、68、80という三つの申年を大局的に眺め、歴史的な意味をこう総括した。「56年が高

度経済成長の入り口としたら、68年は自分たちのアイデンティティーを探る反動の年。『運帯を求めて孤立を恐れず』と唱えた学生運動は、結局はセクシヨナリズムに陥った。次の80年は集団を動かす情緒的な理念よりも、微妙に違う個が一人一人、自立を求めようとした気がします」

92年で田中さんが注目するのは大規模小売店舗法の改正だ。法改正を契機に市場や商店街が消え、アメリカ型の市場経済が入り込む。自ら改造するのではなく、外圧で法案を通す。この頃から日本は、自分で考え、自分で決める度合いが少なくなってきたのかな。国連平和維持活動(PKO)協力法も通り、次の申年の04年には陸自がイラクに派遣されます」

その04年。「フランスやイタリアをはじめとする欧州では小さな村を守り続けるのが自治体なのに、自治体数を半減させた平成の大合併が象徴的です。行政サービス(の)低下と財政の悪化という逆ベクトルの結果が生まれ、住民の意向が反映されにくい遠い存在の自治体となってしまった。小選挙区導入と同じで、目先の形を変えるのが『改革』だと思ひ込み、この国のあり方を問わない日本ですね」

さて来年の丙申は、どんな年か? 田中さんに締めくくってもらおう。「56年の経済白書の警告通り、軍事的膨張が地球規模で強まる空気を危惧する方も多いでしょう。が、であればこそ、『微力だけど、無力じゃない』と、できる時にできる場々できる事を、一人一人ができる限り行おうとする。しなやかな気概が大切ではないでしょうか」